

せつない気持ちで、目が覚めた。

ぬくい上掛けのなかで、枕に頬をうずめたまま、鼻頭に伝った涙と目やにをぬぐう。

なんだか悲しくて、苦しくて、でもそれだけじゃない、甘酸っぱさがこみあげてくるような、さつきまでそんな夢を見ていた気がする。

目を閉じてまどろみながら、夢のストーリーを反芻しようとしたが、まぶたの裏の昏いスクリーンにはなににも映し出されない。やけに真に迫った夢だったのに、もう忘れてしまっている。せつなくて涙ぐんだらしい自分すら、他人事のような。

あきらめて、本日の予定に思いを馳せる。

午前中に教習所に行って、学科を四コマ。最近車に乗ってないな。さきに路上をかためて受けすぎたよな。試験前にもう一回くらい乗っておきたいけど。ああ、そうだ。図書館に本を返しに行かないと。その途中で、発注した商品をスガ南店へもらいに行つて、タジマ店へ持つていけばいい。今日のシフトは誰だっけ。六時からビル清掃のバイト。まだ始めたばかりだけど、きついな。電動クリーナーを扱うのが、あんなに腕力いるとは思わなかった。

初日からなかなか筋肉痛が癒えない腕を、布団のなかで曲げ伸ばしする。上腕をさすって、あれ？と思う。痛くもだるくもない。一晚眠つて治つたのかもしれないが、もつと妙な違和感がある。力仕事のバイトでずいぶなくたくましくなつたはずの腕が、やけに細く頼りない。まるで他人の腕のようだ。じわりと疑念と不安が忍び寄

る。——俺はまだビル清掃のバイトを始めていなかったんだっけ。求人広告に丸をつけただけだったのか。今日のバイトはドラッグストア？今日は何曜日？いや学校に行かなきゃだろ…え、今日は、何月何日だ。

まどろみは一気に霧散し、上掛けをものがきでて、また呆然とする。

——ここは、どこなんだ。

自分が寝起きしている、日に褪せた安アパートの部屋ではない。

ホテルのスウィートのような、高級感あふれるベッドルームだ。ベッドの右手、たつぷり十畳はありそうな部屋の東側は、床から天井まで一面大きな窓になっている。薄いカーテン越しに朝日に染まる、広々としたウッドデッキのテラスが見渡せる。せせこましいのになれている身には、開放感がありすぎて心もとない。背中があつたかと思つたら、背後までガラス張りで日が射しこんでいた。二面に渡つてウッドデッキ：角部屋か…なんて贅沢な。

ベッドの足下には重厚な木目の飾り棚があり、分厚い書籍と、なにか縫い物でもするのか、青い糸巻きがずらりと何段にも渡つて並べられている。見事に青一色だ。その棚のちょうど真正面にはやけに薄べつたくて大きなディスプレイらしきものが収めてある。あれは、ひよつとしてテレビか？でかすぎるだろ…。

左手にはクローゼットの引き戸、その手前には、実物を見たのは初めてじゃないだろうか、大きな機械が鎮座している。

鶴の恩返しをなんとなく思い出しながら、天井を仰ぎ見る。

一面吸いこまれそうに蒼い。

蒼い織物が天井一面を覆っている。

海だ。

微妙な濃淡で気の遠くなるほど幾重にも連なる細い細い蒼の糸、その蒼にたおやかな光の網を投げている繊細な色合いの白が、大きな窓辺から差しこむ本物の朝日に染まって、まるで本当に揺れうごめいているようだ。見ていると体がふらふらしてくる。深い水底から空を仰ぎ見ている錯覚に陥りそうになる。あちこちに銀色の魚影が踊っている。すさまじく手の込んだ織物だ。

頭上の精緻な織物の海から、かたわらの古風な織り機に目を向ける。モダンな室内でひとときわ異彩を放っているが、あれで織ったのだろうか。ここの住人が。

——俺はなんでここに……。

ふいにけたたましい鐘の音が鳴り響き、心底跳びあがった。身をひねって、サイドボードで暴れる目覚まし時計を止める。ほっと息をついて、気がついた。

サイドボードの上に、ブルーのファイル。

その表紙のラベルにはでかでかとした勢いのある字で、

『必ず読め』

と書きなぐつてある。

ファイルを引き寄せて開く。クリアシートに収められたルーズリーフに、二行分を一文でつぶすような大きな文字で、こう書かれていた。

目覚めて、とまどっている渡瀬禮へ

なぜ知らない家にいるのかと怪んでいるだろうな。

でもニは、おまえの家だ。

たとえ、おまえの家でなくても、

このファイルが枕元にあるなら、おまえの家と違ってかまわない。

「ハア？」

思わず呆けた声が漏れた。誰かがかっついていいるのか。テレビのドッキリか。天井の隅、本棚の隙間など、きよろきよろ隠しカメラを探し、眉をひそめてファイルに目を戻す。

もちろんどッキリテレビでもない。芸能人じゃあるまいし。

「はあまあ、そりやそうですけど」

ファイルごときにツツこまれてしまった。なんとも人を食った、性格の悪さがにじみ出ている字だな。苦々しくそう評してから、実はその筆跡がよく見慣れたものであることに、遅ればせながらに気づいた。

誰かのたちの悪い冗談じゃない。この字を見ればわかるだろう。

これを書いたのは、おまえ自身だ。

今のおまえよりは多少はつきりしている昔のおまえだ。

おまえはしっかり物を考えているつもりでも、

なぜ自分がニニにいろのかわからないし、

昨日のことも曖昧だ。その理由は――、

おまえが、5年前、事故に遭って、頭に負った怪我で、

前向性健忘症という記憶障害になったからだ。

ほんの数分前のことを覚えてしまひ、新しい記憶を

蓄積できない。

今のおまえの記憶の容量は、13分間。

これからなを見聞きしても、13分後には忘れさるから

気をつけろ。

以前はこれだけで済んでいたが――。

前向性健忘症は、障害を負う以前の記憶ははつきり

しているが、長い間この病気を患うと、逆向性の記憶

障害も併発することがあるそうだ。

つまり、今のおまえは、数分前だけじゃない、さかのぼって

過去も覚えていっている。

おまえが自分を何歳だと思っているか、今日が何年何月

何日だと思っているか、これは日によって多少はうろつきがある。

現在の、おまえの年齢は、 35歳